

葬られたる秘密

小泉八雲

戸川明三訳

むかし丹波の国に稻村屋源助という金持ちの商人が住んでいた。この人にお園という一人の娘があった。お園は非常に伶俐で、また美人であつたので、源助は田舎の先生の教育だけで育てる事を遺憾に思い、信用のある従者をつけて娘を京都にやり、都の婦人達の受ける上品な芸事を修業させるようにした。こうして教育を受けて後、お園は父の一族の知人——ながらやと云う商人に嫁かたづけられ、ほとんど四年の間その男と楽しく暮した。二人の仲には一人の子——男の子があつた。しかるにお園は結婚後四年目に病氣になり死んでしまった。

その葬式のあつた晩にお園の小さい息子は、お母さんが帰つて来て、二階のお部屋に居たよと云つた。お園は子供を見て微笑んだが、口を利きはしなかつた。それで子供は恐わくなつて逃げて来たと言うのであつた。そこで、一家の内の誰れ彼れが、お園のであつた二階の部屋に行つてみると、驚いたことには、その部屋にある位牌の前に点とされた小さい灯明の光りで、死んだ母なる人の姿が見えたのである。お園は箆笥すなわち抽斗になつている箱の前に立つてゐるらしく、その箆笥にはまだお園の飾り道具や衣類が入つていたのである。お園の頭と肩とはごく瞭然見えたが、腰から

下は姿がだんだん薄くなつて見えなくなつていゝる——
あたかもそれが本人の、はつきりしない反影のように、
また、水面における影の如く透き通つていた。

それで人々は、恐れを抱き部屋を出てしまい、下で
一同集つて相談をしたところ、お園の夫の母の云うに
は『女というものは、自分の小間物が好きなものだが、
お園も自分のものに執著していた。たぶん、それを見
に戻つたのであろう。死人でそんな事をするものもず
いぶんあります——その品物が檀寺にやられずにいる
と。お園の著物や帯もお寺へ納めれば、たぶん魂も安
心するであらう』

で、出来る限り早く、この事を果すという事に極められ、翌朝、抽斗を空からにし、お園の飾り道具や衣裳はみな寺に運ばれた。しかしお園はつぎの夜も帰って来て、前の通り箆笥を見ていた。それからそのつぎの晩も、つぎのつぎの晩も、毎晩帰って来た——ためにこの家は恐怖の家となった。

お園の夫の母はそこで檀寺に行き、住職に事の一件を話し、幽霊の件について相談を求めた。その寺は禅寺であって、住職は学識のある老人で、大玄和尚として知られていた人であった。和尚の言うに『それ

はその簞笥の内か、またはその近くに、何か女の気にかかるものがあるに相違ない』老婦人は答えた——『それでも私共は抽斗を空からにいたしましたので、簞笥にはもう何も御座いませんです』——大玄和尚は言った『宜しい、では、今夜拙僧わたしが御宅へ上り、その部屋で番をいたし、どうしたらいいか考えてみるで御座ろう。どうか、拙僧が呼ばれる時の外は、誰れも番を致しておる部屋に、入らぬよう命じておいていただきたい』

日没後、大玄和尚はその家へ行くと、部屋は自分のために用意が出来ていた。和尚は御経を読みながら、

そこにただ独り坐っていた。が、子の刻過ぎまでは、何も頭れては来なかつた。しかし、その刻限が過ぎると、お園の姿が不意に簞笥の前に、いつとなく輪廓を顕した。その顔は何か気になると云つた様子で、両眼をじつと簞笥に据えていた。

和尚はかかる場合に誦するように定められてある經文を口にして、さてその姿に向つて、お園の戒名を呼んで話しかけた『拙僧わたしは貴女あなたのお助けをするために、ここに來たもので御座る。定めしその簞笥の中には、貴女の心配になるのも無理のない何かがあるのであらう。貴女のために私がそれを探し出して差し上げよう。

か』影は少し頭を動かして、承諾したらしい様子を
した。そこで和尚は起ち上り、一番上の抽斗を開けて
みた。が、それは空であつた。つづいて和尚は、第二、
第三、第四の抽斗を開けた——抽斗の背後うしろや下を気
をつけて探した——箱の内部を気をつけて調べてみた。
が何も無い。しかしお園の姿は前と同じように、気
にかかると思つたようにじつと見つめていた。『どうし
てもらいたいと云うのかしら？』と和尚は考えた。が、
突然こういう事に気がついた。抽斗の中を張つてある
紙の下に何か隠してあるのかもしれない。と、そこで
一番目の抽斗の貼り紙をはがしたが——何も無い！

第二、第三の抽斗の貼り紙をはがしたが——それでもまだ何もない。しかるに一番下の抽斗の貼り紙の下に何か見つかった——一通の手紙である。『貴女の心を悩ましていたものはこれかな?』と和尚は訊ねた。女の影は和尚の方に向つた——その力のない凝視は手紙の上に据えられていた。『拙僧がそれを焼き棄てて進ぜようか?』と和尚は訊ねた。お園の姿は和尚の前に頭を下げた。『今朝すぐに寺で焼き棄て、私の外、誰れにもそれを読ませまい』と和尚は約束した。姿は微笑して消えてしまった。

和尚が梯子段を降りて来た時、夜は明けかけており、一家の人々は心配して下で待つていた。『御心配なさるな、もう二度と影は顕れぬから』と和尚は一同に向つて云つた。果してお園の影は遂に顕れなかつた。

手紙は焼き棄てられた。それはお園が京都で修業していた時に貰つた艶書であつた。しかしその内に書いてあつた事を知っているものは和尚ばかりであつて、秘密は和尚と共に葬られてしまつた。

底本…「小泉八雲全集第八卷家庭版」第一書房

1937（昭和12）年1月15日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

その際、以下の置き換えをおこないました。

「恰も↓あたかも 何時↓いつ 於ける↓おける か
も知れない↓かもしれない 極く↓ごく 此↓この
然るに↓しかるに 随分↓ずいぶん 則ち↓すなわち
其処↓そこ 其↓その 度い↓たい 多分↓たぶん
て戴く↓いただく て居る↓ている て置く↓てお

く て居る↓ておる て見る↓て見る て貰う↓ても
らう 処↓ところ に居る↓にいる 殆とんど↓ほと
んど 又↓また」

入力..京都大学電子テキスト研究会入力班(天野まい)
校正..京都大学電子テキスト研究会校正班(大久保ゆ
う)

2004年3月21日作成

青空文庫作成ファイル..

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。